

はるはなひいな

二ページから

五月五日は

八ページから

あいしてないし だいきらい

二六ページから

ボンゴリアンセタ

一四四ページから

後書・奥付

一五五ページから

ハルは可愛いものが大好きです。

フリルのついたギンガムチェックのクッション。カップケーキの形のキャンドル。フルーツ柄のキャミソールワンピース。

元気で利発な赤ちゃん、リボンちゃんが好き。

ケーキやお菓子は味もちろん大切だけれど、綺麗にデコレートされたその形自体が好き。

純粹で無垢な、小さな子どもたちが好き。

優しくて可愛い京子ちゃんが大好き。

ハルが可愛いものが好きなのは、ハルには京子ちゃんみたいな絶対的な可愛らしさ、無敵の可愛さが無いからです。

ハルはあんまり可愛い女の子ではありません。残念ながら。

だから、たくさん可愛いものに囲まれて、可愛いものをぎゅーっと抱きしめて、可

愛いエッセンスを吸収して、可愛いものと一体になってしまいたいという欲望でドロドロなので。

欲望まみれって、可愛くなくて悲しいです。

「はわわ。何してるんですか、獄寺さん。」

ハルが沢田家に遊びに行くと、既に獄寺がいて、ランボとイーピンに折り紙を教えていた。

母と出掛けて留守にするから、子供たちの面倒を見て欲しいというツナの頼みだったのに。

「折り紙に決まってるだろ、バカ女。」

獄寺はハルの顔も見ずに言う。

そんなコト、訊いていませんよーだ。

あなたがツナさんのお宅にいること自体が、何してるんですか、ですよーだ。

ハルは心の中で舌を出す。

ハルは獄寺が嫌いだ。

乱暴だし、言葉は汚いし、小さな子どもたちを本気になって叱りつけるし。

怒りっぽくって、顔立ちが整っているだけに凄みがあって、怖いから大嫌い。

「おい、コラ、指輪返せよ、バカ牛。」

獄寺のきつい声が飛ぶ。

折り紙を折るのに邪魔で、常時嵌めている指輪のほとんど全部を外して、テーブルの上においてある。

その一つを、ランボが自分の髪の毛のモジヤモジヤの中に隠して遊んでいるらしかった。

「コラッ」

獄寺がランボの頭に手を突っ込んで、髪をぐしゃぐしゃかきまぜる。

「ランボさん、指輪なんて知りませーん。」

ランボはくすぐったがって、にやははと笑っている。

「ケチですねー。安物の指輪一つで。」

ハルはテーブルの上の指輪を一つ取って、自分の指に嵌めてみた。

ごつくて全然可愛くない。

その割にサイズはぴったりで、はれれ、ハル太った？むくんだ？きゃー。

なんてやっていたら、イーピンもやっぱり女の子、隣に来てうらやましそうな顔で見ている。

「イーピンちゃんもつけましょ！」

ごつい中でも比較的細い指輪を選んで、イーピンの指に通してみる。

「はわ。イーピンちゃんには大きいですねえ。」

「おい、人のモノで勝手に遊ぶなよ！」

ランボの頭から出てくる草の種やら玩具やら飴玉をよりわけながら、獄寺が怒鳴る。

その手にキラリ。まだ一つ指輪が残っているのが見える。

あの光り方は。

「獄寺さん、その指輪、フリーサイズじゃないですか。」

「・・・フリーだけど。」

獄寺がいやあな顔をする。

「イーピンちゃんに貸してあげて下さい！」

「いやだ。」

「けち！」

「ケチでもなんでもダメなもんはダメだ。コレ、お袋の形見なんだぞ。」

「じゃあ、女の子用ってことですね！イーピンちゃんにぴったりです。」

強引なハルの口調に慌てたイーピンがふるふる頭を振っている。

「イーピンちゃん、可哀想ですー。」

ハルの言葉に獄寺が指輪を探す手を止める。

「・・・・・・・・ガキの頃から、一度も外したことないんだぞコレ。」

獄寺は左手の薬指に嵌められた、その細い指輪を見つめた。

「下さいなんて言ってますんー。ちよっと貸してって言うてるだけじゃないですか。」

「・・・・・・・・」

獄寺が指輪をくるくる回す。

あともう一声です、とハルが思った時、獄寺が言った。

「・・・・・・・・コレ外すとチンコもげるって言われたんだゾ。」

「きゃー！きゃー！きゃー！セクハラ発言です！変態です！」

「うるせえ、これ嵌めてチンコ生えても知らないからな！」

獄寺は勢い良く指輪を外した。

「良かったですね。イーピンちゃん。」

勝った！やった！と満面の笑顔のハルをよそに、イーピンはその指輪をつけたがらない。

しゃべらないけど日本語を理解できているのだ。

「・・・じゃ折角だから、ハルがつけてみましょう。」

そのほかの指輪とは全くテイストの違ったシルバーのリングは、繊細なレース様の文様と筆記体の文字が刻まれていて、華奢で可愛い。

結構ハルの好みかもしれない。

左手の薬指にはめてみると、サイズを直していないのにハルの指の径にあってしまふ。

あーらら。やっぱり、太っちゃったかなあ？

それより、獄寺の指はどれだけ細いのかと振り返って見ると。

「・・・チンコもげたぞオイ。」

ふわふわの銀髪を腰のあたりまで垂らした少女が、一人険しい目で凄んでいた。

「はれ？獄寺さん髪伸びましたか？」

「そーいう問題じゃねえ！よく見ろ！女になっちまってんだろ！お前はチンコ生えてねえのかよ↓

ミルクに一滴、イチゴジュースを垂らしたような肌。

サクランボ色の唇。

くるんとカールした長いまつげの下の、碧色した大きな目。

身長、骨格、身体つきまで、髪の毛の長さ以外の何一つ、さつきまでと変わっていないのに、獄寺は絶対的に可愛い女の子になっていた。

ちなみに胸元はさつぱり。

変わったところといえば、夜の森にかかる霧が晴れて、月明かりの下の湖が見えた時

のような、そのまとうイメージの変化。

「・・・か、か、可愛いです。獄寺さん。」

「指輪を返せ。」

ハルはぱたぱた自分の身体を確かめた。

「ハルは男の人になっていませんですよ。」

「いいから返せ。」

ハルが手をぱたぱた動かすので、獄寺は指輪を取り返せない。

「いーやーですよー。」

可愛い可愛い。やーん。見たこともない様な可愛い女の子が、ハルの前でおたおたしていますよ！

「いやでもいいから返せ。男に戻る！」

ハルは指輪をはめた手をぎゅうつと握り締めて抵抗する。

「現実を見つめて下さい、獄寺さん。この指輪をすると男の人に見えるだけで、ホントは女の子なんですよ。」

「キット。」

「……ウン……」

思い当たる節でもあるのか、獄寺は固まったまま思案に耽る。

「……霧の波動？」

困った顔で頭を傾げ、ふわりと長い髪が揺れるその様子が、またなんとも可愛らしい。

「ランボさん、このおねーちゃんと遊びますよ。」

ランボはその少女を、獄寺と同一人物と認識できていない。

「!※+k*・!」

イーピンは相変わらず、何を言ってるのか通じない。

と、いうことは。

誰も知らないのと同じです。

「獄寺さん。みんなに内緒にしてあげますから、ちょっと聞いてもらえますか？」

わくわく。何して遊びましょう。

ハル、とびきり可愛いおもちゃを手に入れてしまいましたですよ！

「おい、その紙には落書きするな、アホ牛！」

ハルが獄寺の指輪をしたまま沢田家を出て行った後、獄寺は再びランボとイーピンに折り紙を教えていた。

ランボが言うことをきかないお子様なのはいつものことだから諦めもつくとして、普段は聞き分けの良いイーピンまでもが獄寺の長い髪を触ってきたりして、はかどらない。

「*K-*#\$！」

イーピンが獄寺の髪を一束引いて、つま先立ちで何かを言う。

どうやら、ジェスチャーで獄寺に立ってと言っている。

「立ってって？」

立った獄寺の前で、イーピンは初めに腰に重心を置いて外股で歩いて見せ、次に重心を高めで肩を振らずに歩いて見せた。

「わかった。後の方が女っぽく見えるよな。」

イーピンがこくんこくんと頷く。

「サンキュ。でもな、女になってんのは今日これきりだからさ。」

髑髏もいるし、女性でも守護者はできるだろう。過去のボンゴレの右腕のうちにも女性はいたけれど。

「女になんかなったら、もし十代目が男子校に行ったら一緒に通えないし、保健体育だって別になるし、修学旅行じゃ別の部屋になるし、銭湯も一緒に行けないし、便所だって一緒にいけないし。」

イーピンは小さな口で溜息をつく。

獄寺がのどかに子守を続けている訳は、ハルに『今日の十六時から女の子だけで雛祭をするから、それに参加すれば指輪を返す』と言われたため。

今日は三月三日。桃の節句。

獄寺の予定としても、今日は中国娘のイーピンに日本の雛祭を楽しんでもらうつもりで、マニュアル片手に折り紙で雛飾りを作っていたのだ。

あとはコンビニで買った雛あられ。それと、ダメもとでイーピンのためのスペシャルゲストに声をかけてはおいた。

準備がお粗末なのは、奈々がいないからだだった。なんでも、家光との結婚以来勘当同然だった奈々の実家から、今朝突然に、姪の初節句の祝いに来いと連絡が来たらしい。

イーピンちゃんの節句の準備が、と後ろ髪引かれる奈々は背をツナに押されて出掛け
ていった。

奈々の実家に興味をもつたらしいリボンも、そっちについていている。

ランボとイーピンしかいない沢田家から外へ出ないでいいのなら、この女の姿を誰にも目撃されないですむ。

獄寺がハルの条件を二つ返事でのむと、ハルは準備をしてくる！と言って飛び出して行った。

大方、雛祭にふさわしい料理か何かの準備をしに帰ったのだらうと獄寺は思う。その辺は自分にはカバーできない領域だからありがたい。

ピンポーン。玄関のチャイムが鳴った。

「ハル？早かった・・・」

「チス。」

そこには黒川花が立っていた。

「ハルのダチのダチで、黒川って言うんだけど。あんた、ハルの家にホームステイしてる、鳩ちゃんだよ。ハルから話は聞いている。上がるよ。」

うわあ、なんで黒川が！

あのバカ女、なんで人を呼んだりするんだ。なんだ、ホームステイって。なんだ鳩つて。

獄寺はうつむく。顔を見られたくない。ばれたくない。

花は居間でランボを見つけて、一回しっしつをやってから、テーブルの上の折りかけの折り紙をちよつとのけて、黒い筒状のものを並べはじめた。

ミニボム？まさか刺客か？！

「そこ座って。先に巻いところ。」

さっぱり意味がわからない。獄寺はまじまじと花の顔を見てしまう。

「あー、獄寺の腹違いの妹だってね。ホント、そっくりだわ。」

あ、ばれてはいない。

「ほらその髪の毛、アップにするなら、巻いとかないと。」

花は獄寺の肩を押して床に座らせると、手際よくホットカーラーで髪を巻きはじめた。

武器じゃなく、こういう風にするものだったのか。

「メイクはどんな感じにする？」

メイク？何を作るんだ？

「あなたの彼氏はどんなタイプが好みなの？」

「か、か、かれしっ！？」

「えー、彼氏いないの？こんな可愛いのに。」

「いいいねえっ！！」

マニキュアされた花の手が後ろからまわされ、獄寺の頬をふわりと撫でる。

「なら、どんな男がタイプ？」

「お、おとこがたいふ。ふ。ふ。ふ。」

花の指と言葉の戯れは、獄寺には刺激が強くて、対応できない。

「かあわいい。うぶだねえ。」

背後で花がくつくつと笑うのが聞こえる。

同じ年の女に、うぶと言われたのは悔しい。

獄寺は、だって女じゃないんだから仕方ないだろうと叫びをあげたくなった。

「ごめんごめん。じゃあ、どんな風に化粧してほしい？」

花の指先が、獄寺の唇の先をつんつんつんつん。

ここにきてやっと、獄寺は自分の運命を知った。

そうか、女装をさせられるのか。

いやに条件が良すぎると思ったら、そういうことか。

「おまかせでいいなら、エロかわ系にしとくよ。」

獄寺の中で、その単語と自分が結びつけられずに、思考回路がショートする。
イーピンが心配そうに、獄寺の目の前で手を振っているのが見える。

イーピンだけだ、オレの味方は。良かった雲雀を呼んでおいて。

「良かねえ!!! まずい!!!」

さすがに奴にはばれるだろう。守護者同士なんだし。

「いやだ? そんななら、きれい系♀キュート系?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・きれい系。」

どっちでもかまわねえ。いっそ男らしくして化粧して欲しい。

ああ、早く雲雀に電話して、絶対に来るなと言わなけりや。

花にメイクをされ髪を結びあげられている間、獄寺はぐるぐるそればかりを考えていた。

「よし。髪とメイクは完成。」

だから、花が差し出した鏡をよく考えずにのぞきこんでしまったのだ。

「げっ。」

暗転。

「・・・起きて・・・」

っん。

っん。

いたづらな指先に鼻の頭をつつかれて、獄寺は目を覚ました。

ああ、失敗した。

アイライン濃いめのオレの顔って、姉貴そっくりになんのか。

っん。

っん。

髑髏が獄寺の顔をのぞきこんでいた。

「・・・起きた・・・」

また人数が増えているじゃねえか。

そういえば、ハルの奴、女の子だけで雛祭、とか言っていた。

ハルと獄寺（十イーピン、ランボ）だけで、とは言っていなかった。

「やられた。」

「……鳩ちゃん……」

子供のようにぽおつと上気した、髑髏の頬が近づく。

というか、髑髏の顔全体が、獄寺の顔の上に落ちてきた。

「……かわいい……」

「な、なんだっ！」

キスですかっ！

「……はじめましての頬ずり……」

すりすり。

はじめ産毛だけがぶつかりあって、それから少女の肌に触れる。

ランボやイーピンと遊んでいる時に触れる、子どもの頬のふくふくした感触とは違う。

「……ぼわんぼわん……」

そうだ、ぼわぼわ。

すりすり。

すりすり。

すりすり。

すりすり。

すりすり。

すりすり。

すりすり。

ええっ！いつまで続けるんですか？！

「ふふ。髑髏ちゃん。いつまでも頬ずりしていると、頬っぺたくつついちゃうよ。」

あ、笹川妹だ。

「お料理もー、飾りつけもー、準備できましたー。」

バカ女。

「じゃあ、そろそろ和服の着つけししょうか。」

花。

「・・・和服・・・着る」

髑髏。

あれ？

「鳩ちゃんごめんね。ビアンキさんもさつきまでいたんだけど、たった今イタリアに向
つちやったの。」

京子がすまなそうに言う。

「パパンに手料理ごちそうしなくなったって。家族思いですなー。」
と、能天気ハルが言う。

それは違う、と獄寺は思った。

新しい腹違いの妹の出現に怒って、親父をしめに帰ったんだ。

勝手に他人の家庭をかきまわすな、バカ女。

と、言いたいところだが、バレたくない、バラされたくないから言えない。

まあいいや。もともとぐちやぐちやの家庭だ。親父だって、たたけばほこりが出るだらう。

何より、ビアンキがないのは助かる。

あ、そうだった。獄寺は花に頼んだ。

「黒川、アイラインちよつと薄くして。」

「いいよー。」

忘れないで良かった。うっかり鏡を見るたびに、失神したくはない。

あれ、オレまだなんか忘れてないか？

「もう、お二階にお着物広げであるの。行きましょ。」

京子がイーピンをだっこする。

「ランボ、じゃあオレと遊んで待ってよう。」

獄寺がうっかり普段の調子で喋っても、京子も花も、鳩_{II}獄寺ということ気づかない。
女の子≠獄寺、という先入観は堅い。

「……だめ……着替える……嵐の守護者……」

げっ、一人気づいてるじゃねえかよ！

「……かわいい……鳩ちゃん…………スキ」

なんとなく大丈夫そうな気がして、獄寺はその件についての思考を停止する。
それより、なに最後にぽつんと言ってるんだ。どきどきするじゃないか。

かなり力強く髑髏に手を引かれ、獄寺も2階に上がる。ツナの部屋だ。

「はひい。イーピンちゃん、似合います。」

肩。腹。腕。生足。レースのキャミソール。水玉パンツ。フリルのブラジャー。

「どわっ！」

獄寺はじりじり後じさりするも、髑髏に手をつながれたままなので逃げられない。

「かわいい。鳩ちゃん、恥ずかしがりやさんなの。」

「いいじゃん、女同士なんだからさ。」

獄寺は下着姿の花と京子につかまって、シャツのボタンをはずされる。

獄寺だと知っているハルまで一緒になって、デニムに通したベルトを抜き取っている。

胸が近いんだよ！獄寺はぎゆうと目をつぶる。

ブルツブルツ。

やわらかな手に、寄つてたかつて服を脱がされる。

トンツ。トツ。

發育した胸を見させられるのも恥ずかしければ、まっ平らな胸を見られるのも恥ずかしい。

獄寺は頭に血がのぼつて、タコみたいに真っ赤になっている。

その時、獄寺の聴覚はまったく機能していなかった。

ガラツ。

窓が外から開かれる。

「やあ、また群れ」

「きやあああ！」

「ちかんですう！！！」

「このやろー！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・見てはだめ」

「*、%、?、!、!!」

少女たちに手当たり次第に物を投げつけられ、雲雀が窓から落ちていくのが見えた。

イーピンまで餃子饅を投げている。

「・・・・・・・・・・・・・・・・すっげえ。」

ブルツブルツ。

バイクのエンジン音が去っていく。

凄い、雲雀を撃退しちやったよ、この人たち。

最強かよ！！

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・あ、来るなって電話するの忘れた。」

はるはなひいな 四

女装させられるのかと思いきや、獄寺が着させられたのは帯も細い男物の和服だった。

「やーん。可愛い女の子の男装って素敵ですう。」

ハルは両目に星を浮かべて、はにやーんとなっている。

女ってわかんねー。

やっぱり自分にはなれないと、獄寺は再認識した。

イーピンがお雛さまで、獄寺がお内裏さまという趣向らしい。

京子、ハル、花は官女のなりで、髑髏だけ黒レースがごっそりついたミニのゴスロリ着物だ。

「はい。お写真とりますよー。こっちを向いて笑ってくださいーい。」
イーピンを抱っこしたり、並んだり。

この写真が現像される時、鳩という少女は世界のどこにもいないけれど、今イーピンがコロコロ笑っているからいいや、と獄寺は思う。

ランボも茶巾寿司をほおぼっているし、ボンゴレ式でない年中行事は得点なんか気にしなくていい。

少女たちは桃の花をかたどった和菓子をつまんだり、イーピンの髪に花飾りをつけたり。獄寺が作った折り紙の雛人形の精巧さに舌を巻いたり。

一生のうちたった一日だけ女の子になるのなら、今日が一番いい日なんだろうなと獄寺は思い、そう思った自分に驚いた。

「じゃ、獄寺さん、一日いい子でいたから、指輪を返してあげます。」

片づけも終わり、着替えも済んで、京子と花と髑髏が帰っていった後、ハルは約束通り指輪を返してくれた。

指輪を左手の薬指につけると、ふわふわと長かった髪が消えて元の長さに戻る。身体の他のパーツも男に戻って安堵する。

「ハル、悪いけど十代目達が帰ってくるまで、ランボとイーピン見せてもらえるか？」

「いいですよー。そのかわりに、また女の子だけで遊びましょうね。」

「果てる！」

雲雀に謝罪しに、獄寺は沢田家を飛び出して行った。

「ただいまー。」

日が暮れて随分と経ってから、ツナと奈々は帰宅した。

「お帰りなさいーい。これ獄寺さんが作ったんですよー。」

ハルが指さす先。

はしやぎ疲れて眠っているランボとイーピンの横に、獄寺の折った雛飾り。



「・・・こっちは、楽しかったみたいだね。」

早々に夕食を作り始めた奈々に比べて、ツナの疲労の色が濃い。

「お疲れみたいですう。」

「・・・うん。母方の家って最後に組がついてたんだ。」

「はひい。組ですか！」

「オレに組の十代目を継げって話で。」

「ダブル！ですか！」

「今、リボーンが先に唾つけたのはこっちだって言っつて、あっちのヒットマンとやりあ
つてる。」

「そしたら、マフィアをやめて組の十代目になるかもしれないんですか？」
「・・・・・・・・・・・・・・・・どっちもイヤダ。」

「どちらでも、ハルはついていきますよ？」

桃の花みたいに最強ですから。

はるはなひいな 五

ハルから指輪を取り返し、身体は晴れて自由となった獄寺は、雲雀を探していた。

さまざまな事故や手違いが重なった結果とはいえ、是非にと招待しておきながら、叩き出してしまったのだから後味が悪い。

一方的に自分が悪いのがわかっているので、謝罪しないままでは気持が晴れない。

「ダメもとのつもりだったんだよな。まさか来てくれるとは思わなかった。」

携帯。出ない。

「謝る前に、来てくれた礼も言わなきゃなんねえ。」

メール。返信なし。

既に町は暗くなっている。

雲雀がどれほど怒っているかを思うと、獄寺の腕にざああつと鳥肌が立つ。探して見つけて会って謝って、結局、咬み殺されるのは必至だ。

それでも今日ちゃんと謝っておかなければ、もう二度と、雲雀は自分達の方へ歩み寄ってはこないような気がする。

ここは誠心誠意をもって咬み殺されておかねばならない。

「兎に角、雲雀をみつけないとはじまらない。」

しかし、獄寺には雲雀が休日にいそうな場所が思いつかなかった。

平日なら学校のどこかにいるだろう。

「そういえばオレ、あいつの家も知らねえ。」

道端の石をこーんと蹴っ飛ばすとバス停の時刻表にあたった。あてずっぽうに動きまわってもしかたない。頭を使おう。

獄寺はバス停のベンチに座った。

「雲雀は今どんな気分だ？」

気分が分かれば、いる場所のヒントはきっと見つかる。

範囲は並盛町に限られるのだから。

怒りまくっているのは確かだろうけれど、それだけだったら、もう既に雲雀の方からやってきて獄寺はズタボロにされているはず。

女どもに撃退されたことを悔しかったり、恥ずかしがったり感じているかもしれない。

バスが来る。止まる。

下着姿の女子の群れは、刺激が強過ぎだったりするかな？

ドアが開く。

だけどそれより。

数人の乗客が降りる。

「オレだったら、呼ばれて行ったのに締め出されたら、さびしすぎる。」

獄寺は両手をばってんにして、車掌に乗るつもりがないことを伝える。

「……そうだ。雲雀は今、さびしいんだ。」

ドアが閉まる。

「オレならさびしければ、動物とかふわふわしたものを触りたくなるけど。」

動物を探すか？ぬいぐるみとか探してみるか？なんかびんとこない。

走り出したバスの車体の向こうに雲雀がいた。

はるはなひいな 六

雲雀は獄寺の座るベンチへと向かってくる。

「ヒバリ！」

獄寺は立ち上がって、額が膝につくほど深く頭を下げた。

「ごめん！」

獄寺は雲雀の気配を間近に感じたが、恐ろしくて頭を上げることができない。
どこから咬み殺されるんだ。

うう、こんな人通りのある往来で醜態をさらすことになるとは。

「さっきの髪、やめたの？」

雲雀の声に尖りはない。

むしろ感情のこもらない平板な口調が、かえって寒気を誘う。

雲雀が腰掛け、スチールのベンチがギイと軋む音が聞こえた。

「座りなよ。」

命ぜられた言葉に従い、獄寺は雲雀の右隣に掛けた。

腹の底まで凍りわたるような暗澹たる気配に、獄寺は下を向いたまま顔を上げられ
ない。

「さつきの髪、ふわふわで長くて、君を引きずりまわすのに丁度よさそうなのに。残念
だね。」

恐ろしい。だけど咬み殺される前に、言っておかねば。

「ヒバリ、来てくれてありがとう！それでごめん！」

ああ言えた。もう、咬み殺されたって構わないと獄寺は思う。

「顔をあげて。」

雲雀の手が獄寺の肩をぐういっと掴む。

「まるで、僕が君をいじめているように見えるよ。」

正面を向かされても、獄寺は隣に座る雲雀の顔をみることなどできない。

咬み殺すなら、いっそはやくして欲しい。

「君、いつもしている指輪を三浦ハルにあげた？」

「へっ？」

雲雀が口にした言葉が意外で、獄寺は雲雀の顔を見てしまった。

「指輪ってコレのことか？少し貸してたけど。」

実際には取られたのだが、獄寺限定で魔法の指輪であることは絶対に知られたくないので嘘をつく。

獄寺は左手を雲雀の前に差し出した。

雲雀は薬指に嵌るその指輪を凝視する。

「ふうん。そうなんだ。」

雲雀はそれだけ言うと口を噤んだ。

獄寺は驚いていた。

窓を開けて、ボカスカ物を投げつけられている間に、雲雀がそんなに細かい観察をしていたとは。

その上、獄寺が普段から身につけている指輪まで、見覚えがあるということだ。

「・・・・・・・・指輪をあげる仲なのかと思った。」

ぽっん。雲雀の言葉。

「へ？なんでオレがバカ女に。」

獄寺は即座に否定した。

雲雀は瞬きして目を見開き、獄寺の顔をみつめた。

獄寺は蛇の前の蛙のように身動きできない。

雲雀はふうと息を吐いてから言った。

「せっかくのお招きだし、これから雛祭をしてもらおうよ。」

雲雀が立つ。

「・・・これから？」

バスが来て止まる。降車の客はない。

「ほら、乗るよ。」

2人を乗せるとバスは走りだした。

はるはなひいな 七

2人は並盛海岸でバスを降りた。

乗車中からずっと無言だった雲雀は、やはり獄寺に何も言わずに海へと向かって行く。獄寺もその後続いた。

夏は海水浴客で混雑していた浜辺も、まだ春早い季節の海、しかも夕刻とあつては人っ子一人いない。

雲雀は斜めに振り返り、うつむき加減で歩く獄寺の髪が、潮の香りのする風に揺れるのを見る。

謝罪するという言葉通り、獄寺が大人しくついてくるのが楽しい。

普段、風紀を乱すから、群れているから、と何かと因縁をつけて咬み殺してやる際に獄寺が見せる、敵意と、負けず嫌いの意地と、沢田綱吉の前でいい恰好をしたいという姿勢が、今日はすっかかり抜け落ちていく。

(群れているところを咬み殺すつもりで、沢田の家に行ったんだけどね。)
それを言ったら、従順な獄寺という珍獣を逃してしまうから、教える気はない。

ざわーん。

ざっぱーん。

雲雀はいつのまにかに靴と靴下を脱いで裸足になっていて、寄せくる波に足指を濡らして遊んでいた。

放置された獄寺は、立ちんぼうのまま、雲雀を見ていた。

(どうしよう。)

実は獄寺は、雲雀がどんな意図をもって獄寺を海に連れてきたのか分かっていた。そ

れは折り紙のマニユアルを読了して雛祭についての知識を得ていたからなのだが、あまり嬉しくない事態に陥りそうなので黙っていた。

しかし、黙って遊んでいる雲雀をただぼおつと眺めながら、刑の執行を待っていると、いうのも辛いものがある。

しびれを切らした獄寺は、自分の処刑方法について口を出すことにした。

「雲雀、もしか・・」

「君も脱いだら。」

雲雀は足元の波を見たまま言った。

「・・・ん。」

獄寺の了承の声とともに、バサバサ、バサバサと音がする。

(バサバサ?)

雲雀が怪訝に思つて振り返ると、上半身裸の獄寺がデニムのベルトに手をかけるところだった。

「どこまで脱ぐつもりなの？」

「え、だって、これから流し雛するんだろ？」

獄寺は自分を指した。

「なんだ知つてたのか、流し雛。」

獄寺が波打ち際まで来たところを掴んで海に投げ込んで、「これは流し雛だ」と言おうと考へていた。

着衣で海に投げ込こまれた方がダメージが大きい。予め、寒中水泳する覚悟で脱ぎだされたのでは興ざめだ。

「たんこぶ岩まで泳いで行って帰ってくるので、勘弁してもらえるか？」

「・・・いいよ。」

他にプランがあつたわけではないので、雲雀は了承した。

「そのかわりあんまり待たせるようなら、服を海に投げ込むよ。」

雲雀の言葉に獄寺がびくつとする。

「わーった。行ってくる。」

デニムを脱ぎ捨てて、獄寺は海に向かう。

つめてー、つめてーと繰り返し返しながら、ばしやばしや水に浸かって行く。

(暗くてよく見えない。)

雲雀は薄暗がりの中、獄寺のヌードに目をこらすが見えるのは細いシルエットだけだ。

(なんか目をひかれるんだよな。この子。)

夕方、沢田の家の2階に乗り込もうとした際も、草食動物のメスの群れの中で、半裸の獄寺の姿だけが目に飛び込んできた。何故、下着姿のメスの群れの中に半裸の獄寺が混じっていたのか、その状況は理解し難いが興味も無い。

「よっしゃー。」

ざぶつと肩まで海に漬かった獄寺が、たんこぶ岩に向かって泳ぎはじめた。

ざわーん。

ざっばーん。

「……流し雛なら、雄雛と雌雛、揃えた方がいいかな。」

雲雀は、待っているだけなのはつまらない気がしてきた。海の中で脚を引っぱったりした方が楽しそうだ。

泳ぎは得意だし、並盛海岸の海流も熟知しているので、たんこぶ岩に着く頃には追いつくだろう。

雲雀は制服を脱いで畳んで、夜の海に向かった。

「さ、さみい。」

たんこぶ岩に辿りついて獄寺は海から上がった。

夏に泳いだ時ほどスピードが出ずに時間がかかっている気がする。水が冷た過ぎて筋肉がうまく動かないせいだ。

つってしまいそうな脚のストレッチをするため、ひとやすみするつもりだった。

「うー、カチカチだ。」

岩に座ってふくらはぎの筋肉をさすると、つけっぱなしだった指輪が皮膚にあたって擦れて痛い。失くさないように一つづつはずして、岩のくぼみにまとめて置いていくと、左手の薬指の問題の指輪が残った。

(まあ、誰もいないし、大して変わるわけでもないし、いいか。)

獄寺は指輪をはずした。

ふわあん。

風になびく長いふわふわの銀の髪は、どういうしくみになっているのか謎だが、水には濡れていない。

「やった。タオルがわりになる。」

乾いた髪で冷えた脚の水気を拭おうと、膝を折って体を小さく丸めた時、ガシッと肩

を握られた。

「何それ？」

真後ろから、雲雀が獄寺の両肩を掴んでいた。

「か、髪の毛、デス。」

マズイ。獄寺は焦った。

「何で急に伸びたりするの？」

しかし明かりもない闇の中のこと、雲雀は獄寺の体の方の変化には、気づいていないらしい。誤魔化してしまおう。

「コツがあるんだ。」

「コツ？」

獄寺はヤケクソ気味に雛祭の歌を歌った。

「あかりをつけましょ　ばくだんにー」

歌いながらこっそり岩のくぼみに手を伸ばし、指輪をはめる。

「おはなをあげましょ　どくのはなー」

腰ほどまでであった髪が、一瞬にして肩までの長さに戻る。

「ふうん。面白い芸当だね。」

雲雀の手が肩から外れて、獄寺はほっと息をついた。

ざわーん。

はるはなひいな 八

獄寺は海に飛び込むという単純明快な物理的逃走を図ったが、再び雲雀の両手に肩を掴まれて失敗した。

「この辺浅いから、飛び込んだら危ないよ。ねえ。もう一度、やって見せてよ。」

雲雀の声に感情の起伏は読み取れない。獄寺が逃げようとしたことに機嫌を損ねるより、獄寺の瞬間的性転換に興味深々である証だ。

「できねえ！あれは一日一回しかできねえし！」

獄寺は口から出まかせを言いつつ、まだ逃走の可能性を捨てきれずにジタバタ暴れる。

「嘘だ。夕方、沢田の家で女の子になつてた。」

雲雀の手に力がかかり、獄寺の薄い肩を握りしめる。

「やりなよ。」

獄寺の意識は痛む肩、そして背後の雲雀の状態に向かった。

動かたびに触れる雲雀の体は、温かい素肌。泳いできたのだから当然、獄寺と同様に素っ裸だ。

それなのに。

(トンファー装備だ、こいつ！)

雲雀の腕にアタッチメントで装着された仕込みトンファアの先が背に当たる度、獄寺はぞぞおっと寒気する。獄寺はと言えば、濡れたら使えないダイナマイトは服と一緒に岸に置いてきてしまった。

文字通りの丸腰で、伸縮自在の雲雀のトンファー攻撃に対抗できるとは思えない。

（真っ裸にトンファーなんて姿は、明るいところで見たら間抜けだ。だけど今は笑えねえ。）

「どうせ見えないぜ。こんだけ暗けりや。」

こうなれば、獄寺には雲雀を言いくるめる他、道はない。

「岸に戻ってから、明るいところでやるよ。」

岸に着きさえすれば、ダイナマイトで攻撃できる。

「触ればわかるよ。」

雲雀は獄寺の肩を掴んでいた右手を外しつつ、自分の腹を獄寺の背につけた。

性格的に、気になることを後回しになんてできるわけがない。今、見たい。今、知りたい。

雲雀は右手のひらで獄寺の胸に触った。

「触ってもわかんねえって！オレ、寒いペチャパイだから！」

獄寺は水揚げされたばかりの魚さながらに暴れだしたが、雲雀は知らんぷりで獄寺の胸から手をどけない。

抱きこんだ獄寺の体は雲雀より体温が低い。しかし、寒中水泳をしてきた身には心地よい暖房装置だ。右手をもっと暖めたくなくて、雲雀は獄寺の胸を摩擦するように撫でた。

「ヒヤツ、ンツ、ヘツ、ヘンタイ！」

獄寺の声が掠れて小さい。雲雀は聞きとるため、より獄寺の体に密着した。

「変な声。」

雲雀は右手を次第に下げていく。

「ペチャパイだつて、こつちならわかる。やりなよ。」

雲雀の手は獄寺の肝心のところを一瞬掠めてから上に戻り、指先で脚のつけ根の薄い皮膚を撫でた。

「アッ。」

雲雀は獄寺の返答を待ったが、獄寺が変な声をあげるばかりなので、再び右手を胸に上げ、小さく尖った部分を摘みあげた。

「やっつて、何度言わすの。」

「ヒヤッ、アンツ」

獄寺を変な声で鳴かせているうちに、雲雀は変な気分になってきた。下半身に響く声。雲雀のモノが熱を持ち出してしまったことに、密着した獄寺は気づいているかもしれない。

い。

獄寺の感じる声に反応してしまう自分なんて予想外で、雲雀はイライラしはじめた。摘まみ上げた突起をねじって、そのイライラをぶつける。

「ッ、ン！」

雲雀が攻撃しても、獄寺は感じるばかりだ。

ただそうやって撫でたり触り続けるだけでは、獄寺に言うことを聞かせられそうにもないことに雲雀は気づく。

それどころか、このままずっと獄寺の変な声を聞いていたら、自分の方が先におかしくなってしまうそう。

（悔しいけど、もう、今日はだめだ。また今度明るいところで、服を着ている時にやらせよう。その代わりアレが欲しいな。）

「……今日は諦めてあげる。」

雲雀は右手を獄寺の肩に戻した。

すぐに、獄寺がふうと息を吐くのがわかる。

「その代わり、今日、三浦ハルがしていた指輪を貰うよ。」

獄寺の体がビクツとする。

（やっぱり、この子、三浦ハルを好きなのかな。）

雲雀はムカつきを抑えられず、獄寺の肩を掴んだ両手に力を込めた。

三浦ハルとは、指輪を交換するような仲ではなくても、指輪を貸し借りするような仲。一日ハルがつけていた指輪を、獄寺が大事そうにずっとつけているのが忌々しいから、

今日は追及の手を引いてやる交換条件として取り上げてしまいたい。

「ちようだい。」

ザパーン。ザッパーン。

しばらく、波が岩を打ちつける音しかなかった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・雲雀、ハルのこと好きなのか？」

（雲雀、指輪の秘密に気づいてんのか？

まだ、気づいてないんなら、ハルが気になるってことだよな？）

獄寺は瞬間的に、雲雀がハルを好きであって欲しいと願って、信じた。

「えっ？」

雲雀は珍しくも、素っ頓狂な声をあげた。

「よし、そんなら、改めて紹介してやるよ。」

（雲雀でも好きな女の子のこと考えたら、嬉しくてこんな声出すんだなあ。意外と普通の男の子？）

「うん。ハル、変なところあるし、意地悪なところもあるし、雲雀とお似合いかもな。」

ザ、ザ、ザ。

雲雀は沈黙を続けた。

ザッパーン。

指輪の件も変身の件も、忘れて考えているようで獄寺は安堵する。

これで解放されやつと岸へ泳ぎ戻れると、獄寺は思わず笑みをこぼした。

ザッパーン。

ザッパーン。

「なんで、そうなるの！」

はるはなひいな 九

「……ち、違う？」

頭の後ろで大声を発した雲雀の劍幕に圧倒されて、獄寺はおずおずと尋ねた。

「違うっ！」

獄寺の肩を掴む雲雀の手に、一際力が込もった。

爪が皮膚に食い込んでいる。

明るいとところで見たら、きつと両肩に手形の跡が残ってしまっていることだろう。

それにしても、雲雀がハルを好きなわけじゃないのに、指輪に固執するということは。

「……なんだ。指輪で変身するってわかってんのか。」

(ワオ。自爆だ。)

雲雀は吹き出しそうになるのを堪えた。

獄寺本人が自爆したことに気づいていないのが、なお可笑しい。

「頼む！雲雀！誰にも言わないでくれ！バレたら、十代目と一緒に便所に行けなくなる！」

しかし、折角の楽しい気分も、獄寺の発言であつという間に台無しにされた。

(何、そのジェンダー選択理由。沢田基準もいい加減にしろっ。)

雲雀は獄寺の声や発言を聞く都度、怒ったり驚いたり変な気分になったり笑ったり呆れたりすることに疲れを感じていた。

思い返せば、獄寺のお陰で、感情の振れ幅の非常に広い一日だった。

雲雀は獄寺の後頭部にコツンと額を当てて、ため息をついた。

「フー。」

「ひゃん。」

うなじに雲雀の息を感じた獄寺から変な声があがって、先ほど抑え込んだ変な欲求がきざすのを感じる。

まるで、感情と感覚のフレッシュ・ミックスジュース状態。

「雲雀、お願い！オレ、十代目と一緒に風呂に入りたい！」

「もう君は喋らないでよ！」

雲雀はイライラと獄寺の耳に向かって叫んだ。

耳がキンキンしてしまつた獄寺は、口を噤んで頭をコクコク縦に振る。

雲雀は策略をめぐらす。

不思議な指輪を外すと獄寺が女の子になると公言しても、雲雀に何の益ももたらさない。
い。

秘密にしてやるのは構わない。

しかし、これほどの弱みを握つた今、交換条件にはよつほどのものを要求しなければ
ならない。

（今日はひな祭り。ひな飾りつて、嫁入り道具なんだっけ。）

「いいよ。秘密にしてあげる。そのかわり、」

(見つけた。この子をずうっと近くにおいて、遊び倒せる方法。)

ザ、ザ、ザ。

「君には僕と婚約してもらおう。」

ザ、パーン。

「コ、コンヤクウ？」

獄寺は考えた。

脳細胞を総動員して計算する。

婚約。結婚の約束。

約束であって、今、いきなり結婚するわけではない。

だいたい、世間的には2人とも男だからして、結婚できるわけではない。

まだまだ当分、結婚できる歳にもならない。

もしかしたら、悪い条件ではないのかも。

指輪を外しても女の子にならなくなったら、婚約破棄してしまえばいいんだし。

計算終了。

ザッパーン。

「・・・はい。よろこんで！」

策略と計算の上であるにしろ、これにてめでたく婚約成立。

五月五日は

四月下旬にはいったある日、獄寺のもとにハルから、五月五日の夜に女の子だけで集まろうと誘いの電話が入った。

「まず第一部は、昼間から集まれる人で、ツナさんのうちでランボちゃんのお節句をお祝いします。こっちはもちろん男の人も参加オーケーですよ。」

続いて第二部は、並盛湯に六時に集合して菖蒲湯に入ってから、ハルのうちで三日のハルのお誕生祝いを兼ねたパジャマ・パーティーを開催するのです。獄寺さんも鳩ちゃんになって来てください。」

左手薬指の指輪を外すと女の子になるという獄寺の秘密を知って以来、ハルは度々獄寺を女の子だけの集まりに誘いをかけてくるのだが、獄寺がそんな誘いに乗るはずはない。獄寺にとって、三月三日の変身は単なる事故だ。生まれてこのかた十四年ずっと男だったのに、たった半日の間女の子でいたからといって、女扱いされるのは不本意極まりない。

「行くわけねーだろ、馬鹿。だけど、ショウブユって何だ？」

「5月5日は菖蒲の節句なんですよ。知らないんですかー、獄寺さん。」

「知らねえ。」

「菖蒲の葉っぱをお風呂に入れると、魔除けになるんだそうですよー。菖蒲を、尚武や勝負にかけてゲンをかついだりー。」

「魔除け。」

興味をひかれたらしい獄寺の声に、ハルは再度の誘いをかけた。

「じゃあ、鳩ちゃんが行かれないんなら、獄寺さんはツナさんやランボちゃんたちと並盛湯に行くといいですよ。」

「考えておく。」

返事はつれなかったが、獄寺はしっかり行く気になっていた。

銭湯か。久しぶりに十代目のお背中をお流ししよう。そうしよう。男じやなきや一緒に風呂に入れない。女になんかなつてたまるか。先約があるから第一部には参加できないが、夜には並盛に帰つて来られるだろう。

五日は、なんと雲雀の付き添いで、江戸時代にサムライが切腹した場所を見学に行くことになっている。その後に魔除けの湯ならちようどよい。

この二か月、雲雀とハルが獄寺の秘密をたてに、脅したり無理難題を吹っ掛けてきたりすることはなかった。ハルは獄寺の秘密を握っているという、事実だけでも楽しいらしい。一方、雲雀は交換条件として婚約してしまっているので、口外される心配は多分ない。

三月三日の夜、並盛海岸沖のたんこぶ岩上で婚約した後、二人は岸に泳ぎ戻り服を着て帰りのバスに乗った。拭くものがなくて湿った服が寒かった。隣あつて座った雲雀の体温が温かくて心地よかつた。

他に乗客のいないバスの中で、雲雀は獄寺の秘密を知っている者は、他にいるのか訊いてきた。

「ハルとクロームとイーピンだけだ。」

「そう。他にはもう誰にも知られないようにしないとね。」

雲雀は嫌がらせのつもりで婚約をもちかけたのだろうけれど、その一言で獄寺は雲雀を信用した。

その後、雲雀は並盛中学を卒業して並盛高校へ進学したが、卒業後、獄寺は雲雀の姿を見ていない。春休みが明けてから、応接室の扉は開けっ放しになっていて、前を通る度に、なんとなく中を覗き込んでしまいそうになる。

とはいえ、雲雀がたまに電話をかけてくるので、声だけは聞いているのだった。

「ばれてない？」

「大丈夫、大丈夫。」

獄寺よりも雲雀の方が、秘密が広まることを心配しているような気さえする。

「ねえ、ラテン語とイタリア語って似てるの？」

「さあ？相当違うらしいけど。」

「ロミオとジュリエットって、十四と十六なんだってね。」

「そうだってな。今じゃ、イタリア男性の平均結婚年齢は、三十n後半だってのに。」

たわいのない話をする日もあったが、通話時間は大概短い。根城を高校へ移したばかりの雲雀は忙しいらしかった。

ハルから誘いの連絡が入る数日前、雲雀はめずらしく獄寺に秘密の確認以外の話をした。

「五月五日、イタリア大使館へ行くよ。」

「なんで？」

「用事がある。」

・・・君、忠臣蔵は知ってる？赤穂義士四十七士のうちの十人切腹した松平隠岐守の部屋敷が、今ではイタリア大使館になってるんだ。」

獄寺は考えた。

三月三日、雛祭に招待しておきながら締め出してしまったことを、雲雀はまだ根にもっているのだろう。たんこぶ岩までの寒中水泳で埋め合わせはしたが、雲雀の気は済んでいないかもしれない。連休は暇だ。久しぶりに雲雀の顔を見たい気もする。

「わかった。だけど交通費はお前もちな。」

「もちろん。パスポートを持って来てね。」

雲雀の声に嬉しそうな響きがある。それほどサムライの切腹跡地が見たいのか。雲雀にそんなマニアックな趣味があったとは知らなかった。獄寺自身も他人からは妙だといわれる趣味があるが、サムライのハラキリ現場の何が面白いのかは、さっぱりわからない。雲雀ってやっぱり変な奴だ。獄寺は改めてそう思った。

さて、五月四日の夜、とはいってもまだ午後六時。獄寺は雲雀からの電話を沢田家で受けた。例によって、ツナと山本に勉強を教えていたのだ。

「じゃあ、明日九時に沢田の家。パスポート忘れないでね。」

「え？」

獄寺は、雲雀が自分の居所を知っているのかと驚いた。

「お風呂セット持って行ったら、荷物になるでしょ。沢田のうちに預けて行くよ。」
「えっ！お前も参加すんの！」

獄寺の叫びに、ツナと山本が何事かと視線を送って来る。群れるのを嫌う雲雀が、みんなと一緒に銭湯に行く気になるなんて予想だにしていなかった。

「君の裸を他の男が見るのなんて、気が気じゃない。」

「あの？？？オレ、オトコノコなんですけど？」

「だけど、僕もオトコノコだからね。君の裸体を鑑賞する機会を逃すわけにはいかない。」

「おい！？わけわかんねーぞ、ヒバリ！」

「じゃあ、寝坊しないでね。」

通話は一方的に切られた。

（裸体ってなんだ！男湯に指輪を外してはいるわけがないだろうが↓

ツナと山本がいなければ、こちらから電話して叫んでいるところだ。

（雲雀め。変にも程があるだろう。）

「今の雲雀さんなの？」

「電話連絡してんの？雲雀と？」

ツナと山本は興味津々だった。

「たまにかけてきますよ。あいつの携帯番号、ご存知なければお教えしておきましょう

か？」

ツナは獄寺の差し出す携帯を受け取ると、ポチポチと操作した。

「・・・これ見て、山本。」

「毎日、雲雀から着信あるのなー。」

画面には着信記録が表示されていた。

「たまに、じゃないじゃない。獄寺君。」

「え？雲雀、そんなに電話してきてますか？」

驚く獄寺に、ツナと山本は不思議なそうな顔をする。

「雲雀さんと仲いいんだね？」

疑問形のツナに獄寺も疑問形で応えた。

「・・・さあ？」

五月五日の朝。獄寺が沢田家から出てくる前に、雲雀は外で待っていた。

「おはよう。」

久しぶりに見た雲雀はやっぱり学ランで、獄寺はなんとなく可笑しくなる。並盛高校だつて並中と同じで、制服はブレザーだ。ヒョコ柄のプラスチックの風呂桶を持っているのが、また笑える。

笑顔の獄寺に対し、雲雀はムスツとしていた。

「沢田の家に泊まったの？」

久しぶりだなとか、元気だったかとか、今日はよろしくとか。社交辞令は一つもなしだ。

獄寺も雲雀の態度にムツとした。何故、十代目のお宅に泊まることを、雲雀にとがめられなければならないのか、さっぱりわからない。

「泊まったら、どうだってーんだよ。」

それは嘘だった。風呂桶とタオルを中に預けてきただけだ。ピアンキがいる家で寝泊まりなんか、危険でとてできない。

「チャオス、雲雀。」

ここでリボーンが現われなかったら、雲雀と獄寺のこの日、いや一生は違った展開になっていたかもしれない。

「ハッピーバースデー、雲雀。てめえも16だな。16といたら、イタリアなら飲酒ができる。」

リボーンは雲雀に書類が入っているとおぼしき封筒を渡した。

「ほら、頼まれてたもんだ。ボンゴレはお前を歓迎する。有意義に使いえ。」
「恩に着るよ、赤ん坊。」

雲雀は上から封筒の中身を覗いて微笑んだ。

獄寺はその雲雀の顔を見てドキリとした。

(???)

何故ドキリとしたのかわからず、獄寺は戸惑った。

(なんだこれ???)

ともあれ、リボーンの登場で険悪になりかけた空気が変わった。

雲雀が風呂桶を沢田家に預けると、2人は予定通り出発した。

並盛駅に向かう途中、雲雀は一軒だけ寄りたいたいところがあると言うので、獄寺も同行した。行先は並盛カトリック教会だった。

「雲雀、教会からも上前はねてんのか？」

「まあ、昔からいろいろと便宜を図っているからね。」

祭日にはあつても日曜でないせいか信者の姿はなかった。教会といつても作りは民家と大差なく、獄寺がこども時代に暮らした城に付属した礼拝所の半分の大きさも無い。

「久しぶりだな。教会なんて。」

外で待っていると、すぐに雲雀が戻ってきた。リボンから受け取ったものはまた別の封筒を持っている。

「お待たせ。行こう。」

並盛駅から特急に乗った。

雲雀は文庫本を出してきて読みはじめた。イタリア大使館に入るのに付き添いは必要でも、群れたり慣れあつたりする気はないという意思表示なのだろう。獄寺にもこれと違って雲雀と語りあいたい話題もない。獄寺は下を向いて寝た振りをして考えた。

(リボンさん、誕生日プレゼントに雲雀に何を贈ったんだろう?)

今日が雲雀の誕生日だとは知らなかった。何かやった方がいいんだろうか。今日一日、イタリア大館に付き添ってやるので、十分な気もするが。何しろ片道二時間半の道のりなのだ。

特急を降り、新幹線に乗り換える。腹が減ったなあと思っていたら、雲雀が駅弁と茶を買ってくれていたのでありがたくいただいた。食べ終えたら眠くなって、今度は本当に寝てしまった。

目が覚めた時、獄寺は雲雀の肩に寄りかかっていた。

「あ、悪い。」

獄寺は慌てて雲雀から離れて座り直す。

「別に。」

雲雀は気分を害した様子もなく、一度本を閉じて姿勢を正した。文庫の背に「忠臣蔵」の文字がえた。

（よっぽど楽しみなんだなあ。）

獄寺自身にはハラキリ現場になんの興味も沸かないが、雲雀がこうして楽しそうにしているのを見ていると、どこかほのぼのとした気分になってくる。イーピンが雛祭を楽

しんでいるのを見ていて、嬉しかった感じと似ている。

(?)

ドキリ。

(そうか。リボンからプレゼントもらって笑ってる雲雀のこと、オレ、可愛いと思っ
たんだ。)

獄寺はその事実に驚いて、雲雀の横顔をまじまじと見てしまった。

(可愛いか、この男が？凶暴で自分勝手な論理を振りかざして変なことを言いだす、こ
のわけのわからない雲雀が?)

「どうしたの？」

獄寺の視線を感じた雲雀が顔を上げ、真正面から獄寺を見据えていた。

「あ。」

ドキリ。

獄寺は口ごもった。お前のどこが可愛いのかを考えていましたなんて応えられない。それに。

（あんま近くで、その目で見ないで欲しい。）

ドキリ。

「大丈夫？」

雲雀の顔がなおさら近くに寄せられて、獄寺は焦った。

「ああ、あーあ！タバコ吸いてえ！」

「もうすぐだから我慢しなよ。」

雲雀はほっと息をついてまた本を読みはじめた。

新幹線を品川で降りて山手線に乗り換え、田町駅で下車すると既に十二時半。駅前のコーヒーショップで軽食をとることにした。獄寺は喫煙席に陣取って早速一服しはじめた。

「駅も車内も禁煙じゃ、ストレスで喫煙者が早死にするぜ。」

その時、雲雀は雲雀で自分の思考に集中しており、獄寺の喫煙をとがめる余裕はなかった。

「頼みがあるんだけど。」

「ん？」

雲雀の表情が深刻そうに見えたので、獄寺は煙草を灰皿に置いた。

「誕生日プレゼントのかわりに、大使館にいる間、指輪をはずして欲しい。」
「やだ。」

獄寺は即答した。

「男女のペアで行けば、特別な花を貰える。」

雲雀は獄寺に断られても食い下がった。

「このままの君を、女性だと主張するには無理がある。」

「あつたり前だ！」

獄寺がガンとテーブルを叩いた音で、周囲の客の迷惑そうな顔をむける。

「それなら、並盛へ帰る。」

雲雀はふいっと顔を背けて立ち上がった。

「おい！ここまで来て、それはないだろ！」

獄寺も立ち上がって、雲雀の手を掴む。その際にテーブルの脚を蹴ってしまい、テーブルが横へズザザとずれる。

「その花がそんなに欲しいのか？」

「欲しい。」

落胆のために雲雀の肩が落ちている。それ以上肩が下がったら、学ランが滑りおちてしまう。獄寺は妙な心配をしながら雲雀を引きとめた。雲雀が楽しみにしていたのを知っているから、ここで帰すのは嫌だった。

「わかった。大使館の中でだけだ。そのかわり、帰りの電車の中で食う弁当も10代目への土産もお前持ちだ。」

雲雀は獄寺の条件を聞いて、少し笑った。

「ありがとう。」

獄寺は耳を疑った。雲雀からそんな素直な感謝の言葉を聞けるとは思わなかった。

「じゃあ、行こうか。」

田町駅から徒歩で15分程でイタリア大使館の正門が見えた。2人でよく人の目が無いことを確認してから、獄寺は左手の薬指の指輪をはずして、右手の指につけかえた。左手の薬指以外の指につけても変身の効果がないことは、この2か月の間に研究済みだ。

「ふーん。」

明るいところで獄寺の変身を見るのは初めてのくせに、雲雀は大して関心がなさそうだった。

「じゃあ、入ろう。パスポート出して。」

獄寺は雲雀にパスポートを預けた。

入館の手続きは単純だった。イタリア人でなくとも、イタリア語がわからなくとも、大丈夫そうで、獄寺は拍子抜けた。交通費や弁当代をおごってもらったのに、通訳の仕事は無さそうだった。

「僕は用事を済ませてくるから、君は見学していれば。」

大使館内に入ると、雲雀は獄寺をぼいっと捨てた。

「通訳はいらないのか？」

「ラテン語で通じるか試してみる。」

雲雀はすつと歩いて行ってしまった。

（ラテン語？　そういうや電話でなんか言っていたな。）

獄寺は庭園に出ることにした。大使館の建築物はイタリア人の設計で獄寺の目には珍しくもないが、庭は典型的な日本庭園の名園だということは予め調べてきていた。

（ラテン語なんて、オレのうちでも教わらなかったぞ。）

完全な死語であるラテン語なんて使っているのは、カトリックの坊さんぐらいだ。貴族や知識層では教養として習得されてきたというのも、いつの昔のことか。

（雲雀のうちって、そんな大時代的な家なのか？　この日本で？）

獄寺は首を傾げた。謎だ。一度、雲雀の家を見てみたい気もした。

（んん？でも大使ともなればラテン語話せるかな？大使館づきのカトリックの坊さんとか？）

考えているうちに、獄寺は庭園に出ていた。

うっそうと茂っているように見えて計算された配置の木々に囲まれ、緑濃い池があった。かつて主君のために仇を討ったサムライがハラキリをした場所は、現在その池の中になっっているという。

（もし、万が一、十代目が殺されたら、オレも仇を討つだろう。それで死んでこんな静かな池の中で眠れるのなら、幸せなのかもしれない。）

水面に映る自分のシルエットがおかしい、髪が長い。そうか、今は女の子になっていたのだと思いだした。

その時、携帯電話が鳴った。雲雀からだった。

「戻って来て。」

獄寺の返事も待たずに切れる。

「りよーかい。やっと、通訳の出番かな。」

大使館事務棟へ戻れば、雲雀は大使館のスタッフらしき人員と、口論になっていた。

「
!!!」

獄寺には雲雀が何を言ったのかわからなかった。

ほら、ラテン語なんてイタリア人にはわかりませんてば。

「!?」

口論していた相手が、獄寺を見て破顔した。

そればかりか手を叩いて笑う。それから雲雀に向かって二言三言話してから歩いて行ってしまった。

雲雀は疲労を滲ませた顔で、据え置かれたソファ―に座った。

「何を話してたんだ、雲雀？」

獄寺は雲雀の隣に腰かけた。

「大使は君のことを、素晴らしい美人だと言ったんだ。」

「はああ？」

獄寺は眉をしかめた。

今の自分は女だから、イタリア男なら確かにそんなことを言うが。

「そんな話をしに、わざわざこんなところまで来たのか？」

獄寺は呆れた。

しばらくすると、大使館のスタッフが戻ってきて雲雀に書類を渡した。

「
！」

ラテン語はわからないが、そのニュアンスと態度から、おめでどうと言っているのはわかった。

「用事は済んだよ。帰ろう。」

雲雀は書類をまとめると立ち上がった。

「ああ？お前は庭は見ないのか？」

「いいよ。後で話を聞かせて。」

大使館見学はあっさりと終わってしまった。

「なんだったんだ。一体。」

「わからないならわからない方がいいよ。」

雲雀は獄寺にパスポートを返した。獄寺は大使館を出るが早いか指輪をつけかえて、男の姿に戻った。

帰りの新幹線の中で、獄寺は雲雀に見てきた庭園について思い出せる限りの話しをした。雲雀は相槌を打つでもなく聞いていた。獄寺の口が止まると雲雀が約束通り弁当を買ってよこしたので、食べたなら眠くなり寝てしまった。

目が覚めるとまた雲雀に寄りかかっていたのだが、獄寺は今度は慌てなかった。

「雲雀、本読んでないな。」

開いている位置が、朝から全く変わっていない。雲雀ははじめから忠臣蔵に興味などなかったのだ。獄寺は雲雀に騙されていたことを悟った。

「君に寄りかかれてたら読めない。」

雲雀は文庫本に視線を注いだままだったが、寄りかかる肩が獄寺を意識して動くのが感じられた。

「そうか。」

獄寺は雲雀の肩に頭を預けたまま考えた。

Q 1. リボンから贈られたものは？

Q 2. 教会で受け取ったものは？

Q 3. なぜパスポートが必要だった？

Q 4. なぜ女になっている必要があった？

Q 5. なぜ雲雀は獄寺にわからない言葉を使ったのか？

獄寺は数ある疑問から導きだされる一つの仮説を吟味した。

まさか。

いやしかし。

獄寺はふと気づいて身を起こした。

雲雀から返されたパスポートを取り出して内容を確認する。どこにも変わった点は見つからないが、仮説が確かならば、これはもう偽造品だ。

「大丈夫。普通に使えるよ。君はオトコノコだからね。」

雲雀の目はいまだに活字を追う振りを続けていた。

「あつ、悪党め。」

獄寺は雲雀の腕を掴んだ。

文庫本なんか読む振りをやめろ。お前はオレに言わなければならないことがあるはずだ。

だのに、言いたいことがあり過ぎて言葉にならない。

「契約を履行したままでだよ。」

「それで済ますな!!!」

獄寺は裏切られた気持ちで一杯だった。一人きりなら泣きたかった。まったくひどい

冗談だ。

頭にきた獄寺は、新幹線の車内販売の生八橋を雲雀にあるだけ買わせた。この際、東京土産でなくていい。獄寺はだんまりを決め込み、荷物はすべて雲雀に持たせた。

並盛駅に到着したのは、午後5時過ぎだった。

駅ビルの花屋の店先に、菖蒲の葉が揺れているのが見えた。

「あれも買え。ありったけ買え。特別な花なんて真っ赤な嘘つきやがって。」

雲雀は獄寺の指示通り、菖蒲の束を抱えて店を出てきた。

「わがままはもうおしまい？」

雲雀は獄寺で遊ぶのが楽しそうでたまらないという顔をしていた。

獄寺は心身ともにぐったりで、沢田家へはタクシーを使って戻った。タクシー代は当然雲雀に払わせた。

こどもの日イベント第一部は終わっていて、獄寺は片づけをしていたツナの前に、土産の生八橋の箱の山を差し出した。ツナは少し困った顔をしてから笑ってくれたのに、その笑顔を見ても獄寺は気持ちが悪くなかった。菖蒲の葉は、並盛湯には行かないという奈々にあげた。

午後六時。並盛湯前に集合した。

「獄寺さん、どうかしましたか？」

顔色が悪いというより顔色が無い獄寺を、ハルが心配する。

「・・・男湯入りたくねえ。」

沢田家から出かけるツナらにつられ、予定通り来てはしまったが、菖蒲湯を楽しむ気分ではない。何より雲雀と一緒にいたくない。期待されている裸体なんか、見せたくない。

「はらら。なら、ちょっとこっちへ来て下さい。」

ハルに手を引かれて入った人気のない路地で、獄寺は指輪をつけかえた。今日、二度目の変身だ。

それから、ハルが持って来ていた着替えのパーカーを借りて、着ていたジャケットと交換する。

「今日は鳩ちゃんも来てくれました。」

花と京子が、何の疑問も無く、久しぶりーと抱きついてきた。クロームも頬をすりすりあわせてくる。

遠くで雲雀がいやな顔をしているのが見えた。

「ツナさん、獄寺さんは疲れたから帰ると言っていましたよ。」

女湯の暖簾をくぐる時、ハルの声が聞こえた。

さて、おっぱいがいっぱいいな女湯初体験も、獄寺は楽しめなかった。機械的に髪を洗い身体を洗って鏡を見ると、ビアンキが湯船につかっているのが映っていて、倒れて意識を失った。

「鳩ちゃん、湯あたりしちやいましたね。」

気がついた時は三浦家で、ハルのベッドで寝ていた。女の子だけのパジャマ・パーテイーが始まっていて、京子が生八橋の箱を開いているのが見えた。花とクロームはピラテスのDVDを見て真似をしている。ビアンキも参加していたが、顔にシートパックを貼りつけているので、これ以上倒れずに済みそうだった。

「並盛湯から家まで、雲雀さんがおぶって運んでくれたんですよ。」

ベッドから起き上がって見れば、ハルのものらしい裾や袖口に小さなフリルが並んだ、シャーベット・グリーンのパジャマを着ていた。

「くそ、あの野郎。」

獄寺は手で顔を覆った。

薄く意識があった。身体に感じた雲雀の体温が記憶の隅に残っている。

「どうしたの鳩ちゃん？」

京子が大きな目で、心配そうに見つめている。

「……悪い男に騙された。」

言えるのはこれだけだけど、それがすべて。

A 1. 雲雀のイタリア国籍及びパスポート。& 獄寺の偽造パスポート、ただし本物と寸分変わらない

コピー。つまり性別欄は男性のまま。

A 2. 結婚証明書。

A 3. 婚姻届を出すため。

A 4. パスポートの方が誤りだと証明するため。

A 5. 獄寺が気づかないうちに結婚するため。

イタリアでは男性は十六、女性は十四で結婚できる。さすがロミジュリの国。

雲雀からイタリア国籍が欲しいと言われ、雲雀をボンゴレに取り込みたいリボーンは喜んだ。ボンゴレの力を使って、『日本育ちでイタリア語がわからない日系イタリア人の

雲雀恭弥』という人物の法的身分を創り上げ、イタリア人としてのパスポートを作って贈った。獄寺のパスポートのコピーに関しては何ボーンも不審に思ったが、おまけのもりで贈った。

教会式の結婚式なんて挙げてもないが、並盛町内の教会のこと、証明書を書かせるのは簡単だった。

在日のイタリア人同士が結婚するには、大使館に届出をする。身分証明としてパスポートが必要だったわけだ。しかし、ここで一つ問題があった。獄寺隼人は男だ。大問題だ。しかし、雲雀は女の獄寺を見せて、パスポートの方が誤りだと言いつくしてしまつた。おまけに未成年なら必要なはずの、親の署名も無しで押し通した。

「彼女が成人するまで待つていられない！！」

「本当だ、彼女は素晴らしい美人だ！？」

パスポートの性別欄は即座に女性に訂正され、婚姻は受理された。いずれ本国の証明類も、女性に書き換えられることだろう。

そして雲雀は獄寺自身には、性別が男性のままのパスポートを返した。

知らないうちに結婚してしまった。気づいた時には遅かった。

せめて、プロポーズぐらいして欲しかった。

いやちがう。

からかってもてあそぶだけのために、雲雀からそんなことをされたのが、ひどく悔しく悲しかった。

「雲雀のばかやろー!」

5月5日は結婚記念日。

あいしてないし だいきらい

「雲雀のばかやろー!!!」

五月五日の午後十時、獄寺隼人は三浦ハルのベッドで叫んだ。

二日遅れのハルの誕生会兼。パジャマ・パーティの最中で、獄寺は今、ふわふわした長い髪の少女の姿で、獄寺とは別人の鳩という名の妹としてそこにいる。

不思議なことに、獄寺は左手の薬指から指輪をはずすと女の子に変身する。それは獄寺がものごころつく前からつけていた指輪で、後に実母だと知ることになる大好きなピアノのお姉さんから、何があってもはずさないでと言われたものだ。

「雲雀さんに、何されたんですか？」

気絶から覚めるなり手で顔を覆ってしまった獄寺を気遣っていたハルと京子はもとより、花もクロームもベッドのまわりに集まってくる。

「大丈夫？鳩ちゃん？」

獄寺は俯いたままぐつと奥歯を噛みしめた。騙された、裏切られた、一大事なのに断りも無く決めやがってと湧き上がる雲雀への怒りを吐き出してしまったが、これ以上情報漏らすわけにはいかない。

「相談のるよ。聞かせて。」

肩をとんと叩いて励ましてくれる花に甘え、雲雀に対する恨みつらみを話してしまえたら、多少は気も晴れるのかもしれない。しかし、こうして女子会に紛れ込み、あまつさえ風呂まで一緒に入ったのが実は同級生の男でしたとか、ばれたらやばいどころではない。それに。

「言えねえ。んな恥ずかしいこと。」

獄寺自身わかっていた。雲雀にもてあそばれて傷ついているのは、あんな奴に心を許してしまっていたからこそだと。

じわっ。獄寺は滲みそうになる涙を我慢した。

「・・・いい。言わないで。」

その時、獄寺を柔らかくあたたかいものが包みこんだ。

「・・・わかってるから。」

背後からぎゅうつと抱きしめてきたクロームのおかげで、獄寺の涙腺は決壊した。

「わっ、わっ、わかるわけねえっ」

鳩と獄寺が同一人物だということに勘づいているようだが、今日の昼間にあったことも、獄寺の心の内も、クロームが知るはずもないのに。

「・・・・・・辛い恋してる。」

その言葉がすんなり腑に落ちてしまうのが嫌すぎて、余計に泣ける、コンチクシヨウと思っていたら。

「ハルもっ、ハルもっ、わかりますうっ。」

がばりっ。今度は正面からハルが抱きついてきた。

「ハルのことなんかツナさんの眼中にないことなんて、わかってるんです。でも、いいんです。ハルがツナさんを好きなんだから！」

本泣きはじめるハルに唾然として獄寺は顔を上げた。あっけに取られているうちに涙は止まってしまった。

「だけど、辛いんですっ！片想いって、一方通行って！ツナさんとラブラブになりたいんですっ！」

正味一分も泣けてねえと釈然としないでいる獄寺を、ハルがぎゅうぎゅうと抱きしめてくる。ハルに対抗する気でもあるのか、背後のクロームも腕に力を込めてくる。

「ぐっ。はっ離せっ」

前後から絡みつかれて藻掻く獄寺を助けるべく、花と京子が泣きじやくるハルを宥めにかかる。

ようやくハルが剥がされると、クロームも気が済んだのか抱擁を解いた。

「ふー。助かった。」

獄寺はなんだか可笑しくなって、どかっと仰向けに倒れた。手足をがばっと広げて大の字になる。事態は何も変わらないけれど、確かに気が楽になっている。

すると、それまで沈黙を守ってきたビアンキが、ぬうっと顔を出した。存在自体忘れていたが、顔にシート・マスクを貼りつけて、一人優雅にマニキュアとペディキュアにトップ・コートを施していた。

「だめね。色気が全然足りてないわ。だからあなたの愛しい人はあなたをお持ち帰りしてくれなかったのよ。」

そう言いながらマスクを剥がしたものだから、獄寺はひとたまりもない。ビアンキの

問題発言に反論する暇もなく遠のいていく意識の片隅で、少女達がきやあきやあ沸き立つのが聞こえた。

「お、お持ち帰りなんて、ハレンチですう！」

さっきまで泣いていたハルはもう通常運転だ。

「え、マジで！？そんなこと悩んでたんすか？この子？」

花は師を仰ぐようにビアンキに問う。

「・・・・・・・・お休みなさい。嵐の人。」

クロームはこっそりそう言って、気絶した獄寺に布団を掛けてやった。

あくる朝。獄寺はいつもつけている大切な指輪が見つからなくて探し回るといふ、焦燥感に満ち満ちた悪夢にうなされて目覚めると、雲雀がいた。

「わっ。」

昨夜の記憶の中の、ビアンキの顔があった位置から見下ろしてくる。

「なんでここに?!」

ハルの部屋にいるはずがない、いるべきでない存在だった。雲雀の側にいたくなくて、

わざわざ女の子姿になってまで逃がれてきたというのに。

「あ。起きちゃいましたか。」

傍らにはハルもいた。獄寺はなるべく雲雀から遠ざかるように、ベッドの奥に寄りつ身を起こした。ハルのほか、少女達の姿はない。壁に掛かる大きなビスケット形の時計は、午前十時を指している。まるまる半日眠っていたらしい。

「姉貴達は？」

獄寺は雲雀を見ないようにしてハルに問う。淡いながらも恋の自覚はあつて、正面から雲雀の目を見られなかった。

「京子ちゃん達はちよつと前ですけど、ビアンキさんは昨夜のうちにイタリアに発ちましたよ。パパンから変な電話があつたから、直接会つて話をしなくちゃつて。なんでも、日本から、パパンのお嬢さんと結婚しましたつて、日系人から電報があつたんだそうです。」

獄寺は思わず雲雀に向き直つた。

「まさか、お前、うちのオヤジに！」

「うん。報告しておいたよ。婿養子に入つてやつてもいいよつて。君の実家、財産家だ

しね。」

雲雀は涼しい顔でそうのたまう。

「ハッ。ハッ。」

獄寺は笑えてきた。乾いた笑いだ。オヤジだって、男だと信じてきた息子の結婚相手が、婿養子志望とは思うまい。

「ブン。そういうことかよ。お前、金が大好きだもんなあ。」

恋していると気づいた相手が、金のために自分と結婚したと言う。オレって、父親の愛人だった母親よりも男運が無いんじゃないかなろうか。げっ。オレ男のくせにナチュラルに男運なんて単語使つてやがる。

「お前なんか、お前なんか、知らねえっ。婚約してたって、結婚したって、愛してないし大嫌いだった」

獄寺がわめき散らすと、やっと話が見えてきたハルが慌てだした。

「け、結婚?! ダメです! 無しです! ナツシングです! 鳩ちゃん、まだ中学生です! 清いお付き合ひから始めて下さい!」

雲雀はハルになど耳を貸さない。

「好きだよ。お金。知ってる？お金があれば何だって買える。」

雲雀は片膝をベッドに乗り上げた。

「ヒトの気持ち以外はね。」

ぐんつと急接近した雲雀を避けると、獄寺の背は壁にぶつかった。

「それにしても、君って本当に自覚ないよね。僕のオモチャだっていう。」

背筋をびったり壁につけて、獄寺は雲雀を睨んだ。雲雀は楽しそうな、それでも少し

悲しそうな笑みを浮かべて、獄寺に手を伸ばしてくる。

「失くしちやだめじゃない。」

雲雀は獄寺の左手を取ると薬指にシルバーの指輪をはめた。

あつという間に元通り、馴染んだ男の姿に戻った獄寺はパチクリと瞬きした。大事な

指輪がないことに、たった今まで気づいてさえいなかった。

「これを失くしたら男の子に戻れないよ。そうしたら、獄寺隼人が女の子になったって

沢田綱吉にも言わざるをえなくなるでしょ。秘密が公然のものになってしまったら、君

が僕のオモチャである資格も失くなる。」

「ヒトのこと、オモチャ扱いするんじゃねえよ。」

獄寺はムツとして眉間に皺を寄せる。

自分の部屋なのに、ハルは自分だけが場違いな気がしてきた。むずがゆい。あれれ。まさか。このヒト達って、もしかして。

「焦ったよ。昨夜、君が倒れたって聞いて急いで行ったら、どの指にもこれをしてないんだから。三浦ハルも知らないって言うし。仕方ないから、君をここに置いた後、一晩中ずっと探しまわってた。」

「どこにあった？」

「パーカーのポケット。」

「あ。」

風呂に入る前に、かき上げた髪が絡んだので指輪をはずしたことを、獄寺はようやく思い出した。

「悪い。」

獄寺は雲雀がうつすら疲労を滲ませていることに気づいた。

「・・・随分必死に探したみたいだな。ヒトのモンなのに。」

獄寺に意外そうに言われ、雲雀は小さく嘆息した。

「僕のことなんて君の眼中にないことぐらいわかってるよ。でも、いいんだ。僕が君をオモチャだと思ってるんだから。」

「だからオモチャじゃねえって言ってるだろ！」

獄寺はオモチャ呼ばわりにばかり気を取られているが、ハルはぼつと赤面する。もしかしてもしなくても。

「あわわわわ。」

このヒト達って、両片想い。

無意識に出た変な声に、雲雀と獄寺がハルに注目する。ハルはパタパタ手のひらで顔を扇ぎつつ、話を変えた。

「そうそう。雲雀さん、獄寺さんに相談したいことがあるんですよね？」

雲雀はこくと頷いた。

「獄寺隼人、僕はどっちの君と結婚したことにしようか？」

「はあ？」

雲雀の間が意味不明で、獄寺は首を傾げた。

「男の子の君と、女の子の君、僕が結婚したのはどっちってことにしたらいい？結婚し

ました報告のハガキ刷りたいからさっさと決めてよ。」

「お前、本気の本気で、オレと結婚したって公表する気か?!」

獄寺は目を剥いた。

「ばっ、バカヤロー! 誰にも言うなっ! 何が楽しくてそんなカミングアウトをしなきゃなんねえんだよっ。」

「結婚祝いをもらうのが楽しくて。」

雲雀は胸を張って言うのに、獄寺はがくと肩を落とした。

「……守銭奴め。」

並盛町中の各方面に、嬉々としてご祝儀を徴収しに行く雲雀の姿が目に見えかぶ。

「心配しないで。君が女の子になれることは秘密にしておくよ。約束だからね。」

「公表するなって言ったら?」

「そうしたら残念だけど、獄寺隼人は本当は女の子なのかもしれないって、沢田綱吉に明かすしかないな。」

明白な脅迫だ。獄寺はぐうの音も出せない。

「じゃあ、じゃあ、男のオレと結婚したことにしろっ。ヤーイ、ホモめ!」

やけくそ気味に言う。

「ギャー！ダメですそんなこと！男同士だなんてデンジェラスです！」
話の展開についていけずに空気になりかかっていたハルが追いついた。

「別に構わないよ。僕の配偶者が男だろうと女だろうと、ご祝儀の額を変える人はいない。」

「まあ、確かにな。……ご祝儀半分オレにも寄越せ。」

「いいよ。僕と結婚したことを、祝われない気があるならね。」

「イラナイ。」

獄寺は雲雀の条件を切り捨てた。ハルの目には雲雀がわずかに表情を曇らせたように見えた。

「獄寺さん。鳩さんが結婚したことにして下さい。それで中学生らしい清いお付き合いから始めて下さい！」

ハルとしては助け船のつもりで言ったのだが。

「部外者が口挟まないですよ。僕達の問題なんだから。」

「そうだ。うるさい。ハルは黙ってろ。」

二人共、わかってくれはしなかったから、ハルは面倒くさくなってしまった。もう。

鈍すぎるです、この二人。

「わかりましたですよ。勝手にして下さい。」

ふん。相手しきれない。一生、相手は自分を好きじゃないって勘違いしてればいいんです。

ハルがむくれて部屋の端の椅子に移動する間、獄寺は必死に計算していた。

「オレが結婚したことにすれば、鳩の名は出てこないから秘密を隠し通すには都合がいい。だけど、オレまで同性婚って後ろ指さされたら、十代目の右腕として相応しくねえな。鳩が結婚したことにすれば、オレの妹が雲雀と結婚したってことだ。だから、オレとは何の関係もねえ。うん。そうしよう。雲雀、お前が結婚したのは鳩だ。」

「ふうん。そう。」

ぴりぴり。少し離れていたって、ハルには雲雀の怒りを感じられるし、その理由だつてわかっている。

ハルだって、もしもツナさんから関係無いなんて言われたら傷ついちゃいます。でも、何も言いませんよ。ハルは外野ですもん。

「それなら、結婚祝いをちょうだい。」

「ぶっ。」

獄寺が吹き出す。

「オレからも徴収する気か！」

「兄だったら、妹の結婚祝いするのは当然でしょ。」

「やらねえよ！オレがお前と結婚させられた本人じゃねえかよ。」

ハラハラと見守っていたハルは胸を撫で下ろす。雲雀の気配が軟化している。

「いいよ。」

雲雀は請求を撤回した。ほんのり笑みさえ浮かべて。

パンパン。

ハルが手を叩いた。一件落ち着いたのなら帰って欲しい。自分の部屋なのに、男二人に居着かれていたら着替えもできない。

「お話がお済みでしたら、お引き取り下さいませ。」

ハルは慇懃無礼に言うのとドアを開いた。

指輪を届け、相談も終え、用事はすべて片付いた。雲雀は怒りもせず立ち上がる。

「じゃあ。またね。」

「ああ。」

獄寺はキョロキョロ目を泳がせていた。獄寺は昨夜からハルのパジャマを着たままだつた。

ちなみに、並盛湯で気絶した時に服を着けさせた時も、この部屋でパジャマに着せ替えた時も、ハル達女子で数人がかり。

「服はこちらですよ。」

ハルが机の上を指し示したら、雲雀はすたすた戻ってきた。獄寺の服を手にとって、何をするかと思いきや獄寺に手渡した。

「着替えなよ。待ってる。」

ぺちん。ハルは雲雀の後ろ頭をどついた。

ばぶん。同時に獄寺も枕を雲雀に叩きつけた。

「ハルの部屋でエッチなことは許しません！」

「帰れ！待ってるな！出てけ！」

二発目は喰らうまいと、雲雀はぴよんと横に飛び退いた。すると、ハルの平手の指先

は獄寺の頬を掠り、獄寺の枕攻撃はハルの顔に直撃する。

「うわっ」

「きゃっ」

軽微ながらもダメージを受けたハルと獄寺は、かえって攻撃力を上げた。怒りに目をらんらんとさせ、ぺちんぺちん、ぱふんぱふん、雲雀を部屋から押し出してしまった。

カチャリ。ハルはドアをロックする。

「もう大丈夫です。さあ、獄寺さん、着替えて下さい。」

「ちよつと待て。お前も出てけ。」

獄寺はドアをちよこつと開けて、ハルもポイと追い出した。そしてカチャリ。

「えっ?! 昨日はお風呂もご一緒したのに!」

ハルはドア越しに抗議する。

「鳩ちゃんの裸なんて、もう見慣れてますですよ!」

「オレは女に着替えを見られたくねえっ。」

言われてみれば、私立の女子校に通うハルは同年代の男子の着替えなんか見たことはない。

口ごもってしまったハルに雲雀が声をかけた。

「君の部屋って、隠しカメラとかないの？」

「ありませんですよ、そんなモノ！」

「そう。それなら帰る。」

やはり、待っているというのは獄寺の裸体見たさの口実だった。あまりにも堂々たるオープンスケベぶりにハルはクラクラ目眩がする。

「ちよつと待て、雲雀。話がある。」

ドア越しに獄寺の声が響いて、雲雀は足を止めた。

「聞けよ。大事なことはさつきみたいにおレに相談してから決めろ。お前一人で勝手に進めるんじゃないやねえ。」

雲雀の顔が見えないからこそ、獄寺はくすぶっていた思いを伝えることができた。

「うん。わかった。次に君と結婚する時は予め言うことにするよ。」

「次があつてたまるか！」

獄寺の声を背に、雲雀はふふんと笑って去っていく。

鳩ちゃんも、獄寺さんも、大変な人と結婚しちやったみたいですねえ。一生苦労するかも

ハルは部外者らしく他人事として考える。

でもまあ、いいです。見ているだけなら楽しいですし。

ボンゴリアン七夕

リボーンがボンゴレ式七夕の開催を発表したのは七月四日の夕方だったので、試合時間は実質五、六、七の三日間になった。

「ファミリーの結束を高めるために、ボンゴリアン七夕を行う。各自笹に飾りつけをして、通りがかった奴に短冊を一枚ずつさげてもらえ。七日の夕方までに一番多く短冊を集めたモンが勝ちだ。七日の夕方この時間に笹を持って集まれ。例によってピリの奴は殺すぞ。」

「またリボーンの思いつきに三日も振り回されるのか・・・。」

暗い顔するツナをよそに、山本と張り合う獄寺は右腕に相応しい笹飾りを作ってみせ
ますと意気込む。

「毎年、店に笹飾ってるから、オレはそれでもいいよな？」

「いいぞ。」

竹寿司の七夕飾りはもともとこの辺のちよつとした名物なのだ。あさり道場裏の竹藪から切ってきた笹を店の表に出して置けば、毎年、店の客や近所の子どもが好き好きに短冊をかけていく。

「リボン、山本には甘いよな。」

ツナをはじめ獄寺、山本、ランボの守護者らは強制参加決定だが、ハルと京子も自主的に参加を表明した。

「楽しそうです。」

「夢があつていいよね。」

一等の賞品は『リボンちゃんと一緒に並盛商店街の七夕祭りを楽しむ権』がいいとハルが言い出し、リボンは了承した。

「あたしはガキの相手なんて遠慮したいから、参加者の管理と七日のジャッジをやらせてもらおうよ。ほら、エントリーシートに名前書いて」といって。」

京子とハルに挟まれて同席していた黒川花が、けだるそうにルーズリーフをひらひらさせる。

「お兄ちゃんは、リボンちゃんより『パオパオ師匠の指導受ける権』の方がよさそう。」

「なら、備考欄に書いて。」

その夜早速、花はエクセルで集計シートを作成した。日ごとの獲得短冊枚数の記入欄、合計欄を作って数式を入れ、エントリー順に参加者氏名を打ち込む段になって、花は目をしばたいた。

「あのノゾキ野郎、いつのまに。」

エントリーシートが一番最後に、わずかばかり右肩上がりの筆跡で雲雀恭弥の名前があった。『赤ん坊と手合わせする権』と備考欄にまで記入してある。

黒川花の中で、雲雀恭弥の評価は急降下中だ。雛祭では着替え中を覗かれるし、子ども日には、女の子が雲雀の名を呼んで号泣するのを見た。

「そうだ、あの鳩って子も入れとこう。ハルの家にホームステイしてるんだっけ。」

獄寺が、自分が二人分の名前でエントリーしていることに気づいたのは、七月七日の朝、学校で花に集計シートを見せてもらっている時だった。

「げっ。この、鳩って。」

「ん？獄寺の父違いの妹だろ？ビアンキ姉さんとは父母違いで他人の。」

「うえっ。そーいうことになってんのか……。そうそう、鳩は四日はいなかったけど参加できるのか？」

「いいんじゃない。この頃イベント事には参加してるし。ハルに言つといたから今日は来るっしょ。」

「チツ、ハルの奴め。」

ハルに怒りのメールを送ろうと、獄寺は黒川から離れてから携帯を開いたところで、五日の朝にハルから届いていた「二人分頑張つて」という件名のメールをチェックしていなかったことを思い出してしまった。

「わ。わ。わ。」

たとえお遊びでもボンゴレの名前が冠せられた以上、獄寺はビリになるのは嫌だった。十代目の右腕としてボロ負けなんてありえないのだ。

「今から笹作っても、ランボにも負けちまう。」

獄寺が救いを求めたのは雲雀だった。中学の授業なんてサボリである。

並盛高校の応接室には、それはもう見事な七夕飾りが下がった笹が立っていた。雲雀が風紀委員長の権力を行使して全校生徒・教職員に短冊を書かせたのだから、現時点でダントツ一位。

「鳩の方は欠席で、不戦敗でいいんじゃない？」

今晚ほぼ確実にリボンと手合わせができることになって、雲雀は機嫌がよろしかった。

「可能性が0でないかぎり敵前逃亡はしたくねえ。なあ、短冊分けてくれよ。こんなにあるんだから。」

「できないよ。知ってるでしょ、黒川が一日ごとに集計してるの。今朝までの分はさっき数えていったし。」

きつとチエルベツロの中身は、黒川みたいなやるとなったらとことんやる普通の女なんだらう。獄寺は真理の一端を覗いた気がした。

しよげる獄寺を見て雲雀は考えた。鳩のビリが確実なら、獄寺は今夜参加しないかもしれない。リボンと華麗に戦う自分の雄姿を、獄寺に見てもらえないのはつまらない気がした。

「助言できないこともないけどね。」

「なによ？」

獄寺の身体がぴくんと揺れて、全身で雲雀に向いた。

「可愛い奥さんのために一肌脱いであげるよ。」

「ぶっ。お、おくさんって！籍入れただけだろっ！」

「さあ。竹を切りに行こうか。」

雲雀が獄寺を伴って行った先は、あさり道場裏の竹藪だった。

「あの軒下と提灯に防犯カメラがついているから、指輪を外して切っておいでよ。」

雲雀は獄寺の手に、ポンとのこぎりを渡した。

「手早く作業を終えないと、山本剛が包丁握ったまま飛んでくるかもよ。」

獄寺は考えた。証拠が残ってしまうなら、確かに剛と面識のない少女の姿の方が後々面倒がない。

しかし、女の服が無かった。

「そのままでもいいよ。獄寺隼人似の女が獄寺隼人に罪をかぶせるために、並中男子制服着てるように見えるから。」

「そんなもんか。」

指輪をはずした獄寺が笹を切って防犯カメラの圏外に出るまで、雲雀はじいっと獄寺を見て待っていた。ふわふわと長い銀髪の少女の男子制服姿に、思いがけずときめいてしまった雲雀だった。

「じゃあ、行こうか。」

雲雀は笹の先を手を取った。獄寺は根元の方を持ち、二人前後になって歩いて行った。先は並盛商店街だった。メインストリートには色とりどりのくす玉状の七夕飾りや笹竹が立ち並んでいる。

「ここに立てとけば、後は商店会でやってくれるよ。」

各商店でサービスとして短冊を配布しているから、何の装飾もしていない獄寺の笹にも、既にちらほら買い物客が短冊をつけ始めている。

「これで0点てことはないでしょ。」

「いや、まだランボに勝てるかわかんねえ。」

朝の集計では、ランボの短冊は三十枚だった。意外に多いのは、ボビーノのお詫び係がこつそり短冊をさげていってくれたから。実は中には入江正一の書いた短冊も混じっているのだが、誰も気づいていない。

「君も書いたら足しになるんじゃない。」

「そうだな。雲雀もなんでもいいから書いてくれよ。」

『十代目の右腕になれますように 獄寺隼人』

『夫婦円満 雲雀恭弥』

「何だよ！それはっ！」

「はずしたっていいけど、子牛に負けるかもね。」

「クソツ。」

後書

お久しぶりです。こんにちは。ここまでお読みいただきまして誠にありがとうございます

ます。PDFなら苦手な製本とか装丁とかしないで済むので、いつそのこと総集編にしてみました。エコだし場所とらなくていいし、スマートフォンやタブレットで読みやすいかもしれないと思いますがどうでしょうか。

androidでもiosでも、Adobe Readerのように上から下にページが流れていくタイプのアプリをお使いいただけますと読みやすいです。または、有料ですが、i文庫HDはページ送りを右に設定できるのでお勧めです。

内容はこれまでのヒバ獄と変わらないのですよねー。この二人の十年後以降まで書いていきたいです。ではまた。

おまけ　ボンゴレキャラクターの誕生日 Google カレンダー

<http://syndrome59.web.fc2.com/Calendar.htm>

奥付

二〇一二年十月八日 発行

カンデイド <http://syndrome59.web.fc2.com/top.htm>

新戸楼夢 soushokudoubutu@mbn.nifty.com